

原 著

## 青年期に受傷した脊髄損傷者の自己の統合への努力 —就労のプロセスの分析から—

池 上 邦 子\*<sup>1</sup>

### 要 約

本研究の目的は、青年期に受傷した脊髄損傷者の就労から安定した生活を獲得するプロセスを明らかにすることである。高校・大学時に受傷した脊髄損傷者6名を対象に、半構成的面接を行い、質的記述的に分析した。分析の結果、青年期の脊髄損傷者は、復学の有無に関わらず、【就労に向けての身体的・心理的準備】を整え、様々な不安がある中で【就労への踏み出し】をしていた。就労することで獲得した安定した生活と仕事の両立を維持する努力の上で、【自分なりの充実した生活の確立】をしており、社会の中での自分らしい生き様を見出す【社会における自己の統合】をしていた。このプロセスにおいて親、医療者、同じ障害をもつ仲間など【周囲からの就労・社会生活への後押し】が力強い支援となっていた。医療者は、青年期の脊髄損傷者の就労の意義を認識し、将来の見通しが立てられるような情報提供を行い、就労への意欲が向上するような支援の必要性が示された。

### 1. 緒言

脊髄損傷とは、突発的な脊髄の損傷によって、損傷部位に応じて運動や感覚機能などに様々な障害をもたらす。中でも外傷性の脊髄損傷は、突然の不慮の事故によるものであり、一瞬にして回復の見込みが望めない障害を抱えることになるため、徐々に進行する慢性疾患とは異なり、身体機能障害や心理的苦悩などから、障害の受容や社会参加にも多くの障壁が生じることが考えられる。

高校生、大学生である10~20代は青年期と呼ばれ、心理社会的発達において特徴的な時期であり、エリクソンが提唱しているアイデンティティを確立していく段階<sup>1)</sup>である。また、親から心理的離乳を果たし、新たな人間関係を形成する中で社会性が発達していく途上において、将来を見据えた進路や職業について意思決定していかなければならない時期でもある。そのような不安定な時期での受傷により、これまで抱いていた将来の方向性の変更を余儀なくされることは、アイデンティティ確立に混乱が生じることや、生活への介助の必要性によっては親からの

サポートが避けられない状況となるなど、様々な葛藤が生じると考えられる。そのため、心理面において大きな負担となり、高校、大学での受傷の場合は復学や就労の意思決定に困難を来すことが予測される。

障害者の就労については、障害者雇用促進法<sup>2)</sup>において法定雇用率が定められている。2021年6月時点で、民間企業では597,786人、国では9,605人が就業<sup>3)</sup>しており、年々増加傾向にある。また、2018年の第4次障害者基本計画<sup>4)</sup>において、多様な就業機会の確保としてテレワーク等の柔軟な働き方の推進が概要として掲げられている。脊髄損傷の中でも四肢麻痺を来す頸髄損傷者の場合は、日常生活動作（Activities of Daily Living, 以下ADLとする）が部分自立に留まることもあり、介助を前提とした社会復帰を考慮する必要がある<sup>5)</sup>ため、職場での勤務に支障を来すことが考えられる。そのため、頸髄損傷者にとって、在宅で勤務ができるテレワークの推進は、就業機会の拡大に繋がる。

高校、大学での受傷の場合、まずは復学の選択を

\*1 川崎医療福祉大学 保健看護学部 保健看護学科  
(連絡先) 池上邦子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学  
E-mail: kuniko\_kurose@mw.kawasaki-m.ac.jp

する必要がある。青年期の脊髄損傷者の復学の意思決定においては、自身の身体的状況や学校の受け入れ状況など、様々な現状を考慮した上で自己決定している<sup>6)</sup>ことが明らかとなっている。復学の選択後、様々な過程を経て就労すると考えられるが、復学の経験の有無に関わらず、障害者として初めて社会への一歩を踏み出さなければならない。社会生活<sup>1)</sup>を営んでいくには非常に多くの葛藤や困難があり、身体的にも心理的にも多大な努力を要することが予想される。小児がん経験者<sup>7)</sup>は、就職において疾患による社会的不利の経験や職業選択の制限を体験する中で、培った戦略を基に就職に向けて努力していた。小児がんの場合は外見的に判断しづらいことから、就職時に疾患について自己申告が必要となる点においては脊髄損傷とは異なるが、職業選択の制限という点においては同様であり、就職への大きな心理的葛藤となることが考えられる。脊髄損傷者の就労においては、成人期にある脊髄損傷者の職業人としての自己に対する意味づけ<sup>8)</sup>が明らかになっており、障害を抱えながら職業人として生きていく意義や目的を見出していた。しかし、学生期に受傷した脊髄損傷者が初めて就労する場合、どのようなプロセスを辿り就労しているのか、そのプロセスでの努力、また就労しながらどのように生活を維持しているのかについて明らかにしている研究は極めて少ない。そのため、青年期の脊髄損傷者の就労に向けたプロセスを明らかにすることは、就労への支援の検討材料となり得る。

そこで、本研究の目的は、青年期に受傷した脊髄損傷者の就労から安定した生活を獲得するプロセスを明らかにし、青年期という発達段階に沿って、どのような支援が必要かを検討することである。

## 2. 方法

### 2.1 研究対象者

高校または大学在学中に脊髄を損傷し、研究参加に同意している者とした。受傷時に一般的な大学修業年限である22歳以下で、高校か大学に在籍してお

り、現在就業している受傷者を対象とし、現在の年齢や性別は問わないこととした。損傷レベルにより自立度は異なるが、様々な葛藤の中で就労の方向性を模索している経験には大差がないと考え、損傷レベルは問わないこととした。

### 2.2 データ収集方法

データ収集期間は、2015年5月1日から10月30日であった。対象施設の研究協力者である医師が外来受診時に対象者に口頭で研究協力を依頼し、内諾が得られた対象者に改めて研究者から電話にて参加の自由を保障したうえで意向を確認し、承諾を得られた場合にのみ調査日程と場所を確認した。面談時に再度書面と口頭で研究の主旨及び研究方法について説明したうえで、書面で同意を得た。面接場所は、対象者が希望する場所とした。面接回数は1回とし、面接は体調を考慮し約1時間とした。インタビューガイドに基づき、復学の選択以降の就労に向けた取り組みや思い、現在の生活について半構成的面接を行った。

### 2.3 データ分析方法

研究デザインは質的記述的研究である。面接内容から逐語録を作成し、就労に向けた取り組みや努力、就労を継続しながらどのように生活を維持しているのかについて提供された情報を、意味内容を損なわないよう文脈ごとに分け、要約(コード化)した。類似するコードを比較検討してサブカテゴリーを見出し、さらに抽象度を高め、カテゴリーを抽出した。データ分析は、質的帰納的研究の専門家にスーパーバイズを受けながら進めた。

## 3. 結果

### 3.1 対象者の背景

研究対象者は6名で、概要は表1に示すとおりである。受傷時は17～21歳(高校2年生～大学3年生)で調査時は27～41歳であった。受傷からの経過年数は、9～24年であった。頸髄損傷完全四肢麻痺が2名、胸・腰髄損傷完全四肢麻痺が4名であった。5名は職場勤務(頸髄損傷完全四肢麻痺が1名、胸・腰髄損傷完全

表1 研究対象者の背景

性別	年齢(現在)	学年(受傷時)	損傷高位	復学の有無	就労状況
男性	30代	大学2年生	C5	無	会社員(在宅)
男性	20代	高校3年生	C6	有	会社員
男性	30代	大学1年生	Th5	無	公務員
男性	20代	大学1年生	Th12	有	公務員
男性	30代	大学3年生	Th5	無	公務員
男性	40代	高校2年生	Th4	無	会社員

対麻痺が4名), 1名(頸髄損傷完全四肢麻痺が1名)は在宅勤務であった。

3.2 就労から安定した生活を獲得するプロセスの構造

青年期の脊髄損傷者の, 就労から安定した生活を獲得するプロセスとして, 【就労に向けての身体的・

心理的準備】【就労への踏み出し】【自分なりの充実した生活の確立】【社会における自己の統合】の4カテゴリーが抽出された。さらに, 就労から安定した生活を獲得するプロセスへの影響要因として, 【周囲からの就労・社会生活への後押し】の1カテゴリーが抽出された。内容は表2のとおりである。以下,

表2 青年期の脊髄損傷者の就労から安定した生活を獲得するプロセスと影響要因

	【カテゴリー】	《サブカテゴリー》	主要なコード(全コード数:190)
プロセスの構造	就労に向けての身体的・心理的準備	可能性の実感と努力	可能な就労への模索 高望みしない現実的な目標設定 現在の身体能力での可能性の発見 苦勞しての新たな生活手段の獲得 今後の方向性への見極め
		就労に向けた生活の確立	一人暮らしで困らないような排便コントロールの工夫 再入院で整理してもらった生活リズム 入院中の生活リズムを維持したい思い
		就労に向けた気持ちの立て直し	早く働いて目標を達成していくことへの考え方の転換 社会へと一歩踏み出すきっかけへの納得 就労するための自分への理由づけ 自立した生活への憧れ
		努力からの自信の見出し	社会に出るための自信となった職リハでの経験 自分らしい生活を取り戻していくおもしろさ 就職するための自信となったマラソン 一人暮らしへの自信がついた寮生活
		就労環境の未整備への不安	仕事をやっていけるのかという不安 困難な就労への具体的なイメージ 先の見えない就労への不安 車椅子の自分を社会が受け入れてくれるのかという不安 自宅で生活リズムを維持する難しさ プレッシャーとなる排便コントロール
	就労への踏み出し	自分にとって最良な方向性の自己決定	就労に向けての第一歩 将来への不安を解消できた就職 先が見えた就職先の決定 今の自分の裁量の選択肢であった就職
	自分なりの充実した生活の確立	現在の安定した生活の基盤	理想はあるが今の自分の立場においては十分生活 多少不自由はあるが問題ない生活 健常者と同じように残業をする生活 身体的精神的に安定した生活 介助があって成立している生活 就労により確立されたメリハリのある生活
		就労と生活の両立を維持する努力	仕事に支障のない排便パターンの確立 排便パターンを崩さないような生活リズムの維持 互いに干渉しない自由な時間の確立 マラソンを生活の一部にすることで安定する体調 日常的な小さな気分転換
		自己の可能性拡大への期待	憧れの先輩たちに近づくための努力 健常者と変わらない仕事での評価への期待 目標に向かって常に前進するモチベーションの維持 追いかける人の存在によって生じる挑戦欲求
	社会における自己の統合	新たな価値観の受けとめ	受傷前より確実に真剣に自分の人生を生きているという自覚 ハードルを乗り越えるための努力でかき消す引け目 受傷前と変わらない考え方の自覚 障害をもって生きる者の役割の自覚 収入により大きくなった自分の存在価値 就労に障害の有無は関係ないと思える
安定した生活の中での葛藤		機能的に自立できない身体と将来への不安 将来の介護者への不安 健常者との違いを痛感する辛さ 車椅子生活での社会への不満	
親からの後押し		親が用意してくれたベースがある安心感 就労に向けての親の支援 社会生活を送るための親からの助言 親が整えてくれた生活環境	
影響要因	周囲からの就労・社会生活への後押し	医療者からの後押し	外来受診時の職リハでの講習参加の勧め 入院中のMSWからの情報提供 生活パターンに合わせた排泄管理方法の指導 就労へのMSWからの積極的な支援
		仲間からの後押し	働きながらマラソンをする先輩の誘い 自分より先に車椅子の先輩が働いている安心感 将来に大きな影響を与える人との出会い 先輩から学んだ排便管理方法 常に上を目指す先輩の存在

カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >, 対象者の語りは「」で示した。

### 3.2.1 【就労に向けての身体的・心理的準備】

自分では対処することが困難な不安を抱えながらも、就労が可能となるように、身体的・心理的に整え準備をしていた。このカテゴリーは、<可能性の実感と努力><就労に向けた生活の確立><就労に向けた気持ちの立て直し><努力からの自信の見出し><就労環境の未整備への不安>の5つのサブカテゴリーから構成された。

<可能性の実感と努力>とは、自身の能力で可能な就労の方向性を模索、自覚し、そこに向けて努力していたことである。

「それなりのことはまあこの手でもできたんで。そういう方向（パソコン）に進まなきゃ、他に選択肢がないと思ってたから。」のように、今の自分の身体機能に合わせた就労を見定め、必要な能力の獲得を目指し努力していた。

「同じレベルの人が車に乗ってるのを見て、それまで乗れないと思ってたのに、乗れるんだ！っていうのがわかって、免許とれるまで人の2〜3倍は時間かかりました。」のように、不可能だと思っていたことに挑戦することで、時間はかかっても行動範囲の拡大を実感していた。

<就労に向けた生活の確立>とは、就労に支障がないように日常生活のリズムを整えていたことである。

「一人だと排便は困ることはそりゃあ漏れたりとか困ることはありますよね。だから漏れんためにはどうするか、みたいな。時間がかかってもいいから出すとか。」のように、一人暮らしで困らないように排便コントロールの工夫をしていた。

「病院でしっかりリズムを作ってもらって、だらだらしたくなかったの。」のように、就労に向けて入院中に確立された生活リズムを維持しようとしていた。

<就労に向けた気持ちの立て直し>とは、就労に向けて自分の気持ちを前向きに納得させていたことである。

「自立したいなって気持ちはすごいあった。せっかく働けるんだから、早く訓練校行って早く働いた方が、人より早く車に乗れるし、色々買えるし、遊べるって考えたんですね。」のように、早く自立したいという強い思いから、就労することを前向きに捉えていた。

「（親の喧嘩の）とばかりが僕に当たって、そこから逃れる手として、黙ってこそと（就活を）やって、家の中の雰囲気が変わればいいかなという

ぐらいの気持ちでやってた。最初は躊躇しましたけどね。ホームページで会社見つけて、実際やるとなると二の足を踏んで、踏んで踏んで踏み続けて。」のように、就労に対する意欲はあっても、最初の一步がなかなか踏み出せないでいたが、家族内でのトラブルを就労へのきっかけとして捉えていた。

<努力からの自信の見出し>とは、様々な経験での努力や行動範囲の広がり、楽しいと思える趣味を見つけることが就労に向けた自信の獲得に繋がっていたことである。

「（職リハで）いろんな経験できて、資格も取ってもらったんで、自信はつきましたよね。社会人になるための自信はついたんじゃないかと思えますね。」のように、職業リハビリテーションでの経験が就労する上での自信となっていた。

「少しずつ自分の生活取り戻していったら、ちょっとなんかおもしろいんですよ。取り戻していったらみたいな。今までの生活を取り戻して、どんどん今までより上がってるのがなんか実感として感じるから、それも自信になりますね。」のように、少しずつ自分の思い描く生活に近付き、生活レベルの向上を実感することが、自信となっていた。

「就職する前に、（同じ障害の）先輩に出会って車椅子マラソン教えてもらって、それが励みになって、健常者より早いとか負けないとか。そういう強い後押しを自分で作っというっていったから（就職が）だいぶ違ったかな。」のように、先輩から車椅子マラソンの指導をうけることが、就労に向けた自尊心の向上に繋がっていた。

<就労環境の未整備への不安>とは、障害を抱えながら就労する上で、障害に起因する生活上の困難や社会的立場の弱さや偏見などにより、就労への不安を抱いていたことである。

「車椅子で生きていけるんかなっていう不安はすごかったですね。だって車椅子で社会参加してるっていうのはあんまり聞いたことがなかったし。」のように、車椅子での社会参加の情報がないため、障害を抱えて社会の中でやっていけるのかという大きな不安を抱えていた。

「社会が受け入れてくれるんかなっていうのはすごい不安でしたけどね。」のように、車椅子での就労となる自分を、社会が受け入れてくれるのかという思いが、社会に出ていくことへの不安となっていた。

「復学した時、排便コントロールっていうところがネックだったりして。大学だったら講義少々抜けたりできるけど。仕事なんて就業時間は職場にいないといけなくて、そういう意味でのプレッシャー

は自分の中でありましたよね。」のように、復学時の排便コントロールへの困難感が、就労への気がかりとなっていた。

### 3.2.2 【就労への踏み出し】

自分で納得し決定した道を進み、様々な不安がある中で就労していた。このカテゴリーは、《自分にとって最良な方向性の自己決定》の1つのサブカテゴリーから構成された。

《自分にとって最良な方向性の自己決定》とは、様々な不安はあっても、今の自分にとって最良な選択を自分で決定し、踏み出していたことである。

「自分が今選べるやつでってなったら今の職場でした。今の自分で選べる最良の選択肢ってなって、それがでてきました。」のように、自分の現状をしっかりと見極め、今の自分にとって最良の選択をしていた。

「不安感は就職が決まってなくなったんで、まあなんとかなるんかなーと、ちょっと先が見えた感じですね。」のように、就職先が決定したことで不安が軽減し、自分の将来の見通しが立てられるようになっていた。

### 3.2.3 【自分なりの充実した生活の確立】

多少の不自由や理想とする生活像はあっても、健常者と同じように充実していると思える生活を確立していた。このカテゴリーは、《現在の安定した生活の基盤》《就労と生活の両立を維持する努力》の2つのサブカテゴリーから構成された。

《現在の安定した生活の基盤》とは、現在は規則正しい生活を送っており、今の自分の立場において十分だと思うことのできる生活の基盤を確立していたことである。

「満足かっていったらもっとやりたいことはあるんですよ。でも今の自分の立場を考えると十分かなと。」のように、やりたいことへの欲求はあるものの、現状の生活が自分にとっては十分だと捉えていた。

「頭で考えるのは僕がやって、体を動かすようなことは頼むけど僕じゃあできんけん、オカンやってくれと。そういうふうにもうお互い割り切ってるんで。」のように、介助があつての生活ではあるが、相互の役割を認識した上での生活が成り立っていた。

《就労と生活の両立を維持する努力》とは、就労に支障がないような日常生活を継続するための努力をしていたことである。

「職場で緩いのが出たりとかあるけど、そういう時はパットを当てたりとか、紙おむつを履いてたりとか不安な時はしてるので。」のように、排泄に関するトラブル時に、仕事に支障がないように自分なりに工夫をしていた。

「残りの時間（仕事以外の時間）は仕事の話はしないし、向こう（親）からも邪魔したらあかんだろうということで全然別の生活になっていて。」のように、在宅での仕事と介助を受けながらの生活の中で、互いに干渉しない生活を維持していた。

### 3.2.4 【社会における自己の統合】

現在の安定した生活を維持する中で、過去を振り返り現状を見極めることで、自分なりの生き様を見出していた。このカテゴリーは、《自己の可能性拡大への期待》《新たな価値観の受け止め》《安定した生活の中での葛藤》の3つのサブカテゴリーから構成された。

《自己の可能性拡大への期待》とは、安定した生活ができているからこそ、更なる可能性の拡大を期待していたことである。

「車椅子の人でも充実してる人もたくさんいらっしゃいますからね、そういう人たちみたいになりたいがために一生懸命やってるみたいよ。（入院中は）あの人たちみたいに早く動けるようになりたいとか、大事だと思いますね、すごく。」のように、受傷からこれまで常に先を行く先輩の姿に刺激を受けることで、今よりさらに充実した生活を目指すことに繋がっていた。

「それなりに業務をこなしていけば、会社が評価してくれるだろうという淡い期待があつて、普通の一般の会社員と同じで。」のように、健常者と同じように仕事への評価を期待していた。

《新たな価値観の受け止め》とは、受傷から現在までの経験や思いを基に、障害をもつありのままの自分を肯定的に受け入れていたことである。

「あのまま大学生活が続いてたらダメ人間になってますね。漠然と生きてました。その時よりは確実に真剣に自分の人生を生きてる気はしますね。」のように、受傷前の自分と受傷後の自分を比較し、現在の生き様を肯定的に捉えていた。

「（けがをしても考え方は）特に変わったとは思わないですね。事故前と変わらない考えでずっとやってるから。」のように、受傷前と変わらない気持ちを保つことができていると思えると同時に、受傷という大きな変化を受けても変わらないでいられた自分の存在を認識していた。

「車椅子の分野を知ってもらいたい。車椅子で何が生活の中で不便か、自分たちの障害を理解してもらいたい。車椅子に乗ってる人もみんな違うんですよ。障害の状況によって生活の仕方でも変わってくるし。」のように、障害のある自分たちの生活を多くの人に知ってもらいたいという思いを抱き、障害者としての新たな役割を認識していた。

《安定した生活の中での葛藤》とは、現在の安定した状態が維持できなくなることへの不安や社会へのジレンマを抱えていたことである。

「(親の)体が動いているうちは今の生活レベルが維持できるけど、この先歳をとって維持できなくなった時に、僕も何もできなくなってるから、じゃあその時にどうしたらいいのかというのはすごく不安です。」のように、介護者である親の健康状態によって左右される自分の将来の生活への不安を抱いていた。

「(長く経つと)逆に健常者と同じことができないのが辛くなってきます。物理的に階段とか、精神的に人の目とか、社会的にっていうと社会全体が障害者を受け入れようとしていない部分もあるので。」のように、障害者である自身を受け入れながらも、社会生活の中で様々な葛藤を抱いていた。

### 3.3 就労から安定した生活を獲得するプロセスへの影響要因

#### 3.3.1 【周囲からの就労・社会生活への後押し】

常に支えてくれる親の存在、医療者からの支援、同じ障害をもつ仲間からの刺激が、就労への踏み出し、社会生活の継続への支えとなっていた。このカテゴリーは、《親からの後押し》《医療者からの後押し》《仲間からの後押し》の3つのサブカテゴリーから構成された。

《親からの後押し》とは、親から就労、社会生活を継続するために、精神的にも物理的にも支えとなっていたことである。

「実家の隣に自分専用の部屋を建ててもらって、平屋の家を建てていいって言うてくれたんで、そこでベースが作られたので。」のように、親が生活の基盤となる居住環境を整えることが後押しとなっていた。

《医療者からの後押し》とは、医療者から就労に向けた支援を受けていたことである。

「教習所に通ってる頃に外来受診で病院に来て、その時にケースワーカーの人から職リハで募集しとるよって言われて、それで行ってみようかなーと思って。」のように、MSWからの情報提供によって今後の方向性を提示されたことが、職業リハビリテーションセンターに入所するきっかけとなり、その後の就労に繋がっていた。

《仲間からの後押し》とは、同じ障害をもつ仲間が、就労、社会生活での手本となっていたことである。

「入院してる頃、(先輩が)近くにおられて、働きながらマラソンやってるのを見てたので、地元に戻るから一緒に練習しようやみたいな感じで誘いがあって、そういう意味では働きながらもマラソン出

来るんだ、って最初の頃は同じように真似をしてました。」のように、働きながらも仕事以外に没頭できることを見つけている先輩の存在が手本となっていた。

## 4. 考察

青年期の脊髄損傷者の就労から現在の安定した生活を獲得するプロセスは、復学の有無に関わらず、【就労に向けての身体的・心理的準備】を整え、様々な不安がある中で【就労への踏み出し】をしていた。就労することで獲得した安定した生活と就労の両立を維持する努力の上で、【自分なりの充実した生活の確立】をしており、社会の中での自分らしい生き様を見出す【社会における自己の統合】をしていた。また、このプロセスにおいて親、医療者、同じ障害をもつ仲間など【周囲からの就労・社会生活への後押し】が力強い支援となっていたことが導き出された。

以下に、青年期の脊髄損傷者にとっての就労の意義、および必要な支援の方向性について検討する。

### 4.1 青年期の脊髄損傷者の就労の意義

青年期に受傷した脊髄損傷者は、病院あるいは施設でのリハビリテーション期間を経て復学の選択をし、それぞれの過程を経て就労へと向かう。復学の有無に関わらず、脊髄損傷者として初めて社会生活を営んでいく状況の中で、障害を抱えながら就労する困難や不安を抱きながらも、自身の能力で可能な就労の方向性を模索し、【就労に向けての身体的・心理的準備】をしていた。就職先の決定によって自分の将来の見通しが立てられるようになり、前向きな気持ちで【就労への踏み出し】ができていた。【就労への踏み出し】において、【周囲からの就労・社会生活への後押し】が力強い支援となっていた。

今回の対象者の中には、復学した者と復学していない者がおり、《就労に向けた気持ちの立て直し》や《就労環境の未整備への不安》において復学していない者の特徴的な語りが見られた。復学していない者は、就労について「車椅子で生きていけるかなっていう不安があった」や「実際にやるとなると二の足を踏んで、踏んで踏んで踏み続けて」のように語っており、就労に対する漠然とした不安や躊躇する気持ちが強かったと考えられる。小児がん経験者の就労においても、学生である小児がん経験者は、身体的なことよりも社会の中で自分がどのように受け入れられるのか、この身体で働いていけるのかという就職への漠然とした不安が挙げられており<sup>9)</sup>、これから社会に出て生活していくという点において、同様の不安が示されていた。一方、復学した

者は、復学時の排便コントロールの困難さを体験したことから、就労への不安を抱いていたが、就労への漠然とした不安は示されなかった。その理由としては、復学時に学校環境の調整を経験していることや、学校という健常者の集団の中での生活から、車椅子である自身がどのように捉えられるのかを体感しているため、社会生活に戻ることに對しての漠然とした不安ではなく、排便コントロールという具体的な不安が示されていたと考えられる。復学していない者にとっては、受傷後初めての社会復帰が就労となるため、就労に対する漠然とした不安に駆られることが予測される。この身体で社会人としてやっ ていくことができるのかという不安が、就労意欲の低下にも繋がると考える。また、車椅子での社会復帰に対する情報の少なさから、社会へ出ていくことへの不安を抱いていた。思春期発症がん患者の社会生活復帰に必要な情報<sup>10)</sup>として、同じ病気を乗り越えてきた人の希望を持てる情報や、就職活動の進め方に関する情報など、社会復帰における情報の必要性が示されている。本研究においても、〈医療者からの後押し〉として、就労に向けた情報提供や、就労を見越した日常生活管理の指導が行われており、就労に向けた後押しとなっていた。また、〈仲間からの後押し〉として、同じ障害をもつ仲間からの情報は就労や社会生活での手本となっていた。受傷後の苦悩からの立ち直り<sup>11)</sup>から、ADLの再獲得期や復学の検討期<sup>9)</sup>において仲間の存在は前進への原動力であったが、その後の就労においても仲間の存在は大きな支えとなっていた。同じ障害をもつ仲間が、自分にとって未知の世界をすでに経験していることは、大きな安心材料となり、さらなる向上心を高めてくれると考える。

【就労への踏み出し】をした青年期の脊髄損傷者は、就労に支障のない生活リズムを確立し、それを継続するための努力をすることで、【自分なりの充実した生活の確立】をしていた。現在の安定した生活の基盤があるからこそその不安や葛藤を抱えながらも、自身の更なる可能性に期待したり、受傷後の自身を振り返ることで、障害をもつありのままの自分を受け入れようとしており、自分なりの生き様を見出す【社会における自己の統合】をしていた。

青年期の脊髄損傷者は、就労して安定した生活を確立できているからこそ、多少の不自由はあっても健常者と同じようなライフスタイルで日常生活を送ることができている認識や、多くの困難な経験をしながら、それでも受傷前と変わらない自己の存在を認識していた。これは、障害をもつ前の自己と、障害をもった今の自己を比較することで、変わらない

ていられた自己の存在を認識していると考えられる。田垣<sup>12)</sup>は、自己には変化がないという受傷の前と後をつなげる意味づけによって、受傷という喪失体験による断絶感を補うことを示している。また、エリクソンは過去の上に現在の自分がいるという連続性と一貫性が、自分を支える心理的要件となり、それによってアイデンティティが確立していく<sup>1)</sup>としている。受傷により大きく変化した部分が多い中で、それでも変化しない自己を認識することは、受傷による断絶感を補い、連続性と一貫性を保持しようとする重要な心理的な働きであるといえる。このような働きは、受傷により混乱を来していたアイデンティティの再確立に他ならないと考える。

青年期は、「自分とは何か」、価値ある生き方を考えることによってアイデンティティを獲得していく<sup>13)</sup>。本研究では就労して社会の一員として生活する中で、これまで培われてきた様々な経験やそこの努力によって、障害をもつ今の自分の姿を肯定的に受け入れていた。畑江<sup>14)</sup>は、小児がんを経験した青年は、病気体験からがんになった意味を感じとっていたと報告しており、自身の将来への期待を拡大させたり、これまでの経験を基にした新たな役割の自覚においては、本研究においても同様に示された。青年期の脊髄損傷者は、受傷直後のどん底から這い上がってくる経験<sup>6,11)</sup>をしており、それはいつ挫折してもおかしくないほど過酷なものである。そこを乗り越えてきた過程すべてが、障害を自分のこととして受け入れてきた過程であり、社会生活を送る過程の中で見出した価値に肯定的な意味づけをしていたと考える。堀田と市村<sup>8)</sup>は、成人期の脊髄損傷者は職業人としての意味づけとして、働く意義の再考や就労だけに留まらない役割の転換を明らかにしている。青年期は、本来、職業選択をしながら社会との関わりの中で自己の役割を見つけていく段階である。青年期の脊髄損傷者が、新たな自己の役割を認識し、価値ある生き方を見出していく上で、社会との関わりをもてる就労の意義は非常に大きいことが示唆された。

#### 4.2 就労に向けた支援の方向性の検討

先に述べたように、青年期の脊髄損傷者が就労することの意義は大きい。社会経験の少ない脊髄損傷者にとっては、就労に関する情報の少なさは社会生活への不安を増幅し、就労意欲の低下にも繋がりがかねない。古澤<sup>15)</sup>は、就労しやすい脊髄損傷者として、「就労意欲」の重要性を掲げており、就労に不可欠な因子としている。本研究において、就労に関する情報提供は、入院期間中だけではなく外来受診時にも行われており、就労へと繋がっていた。医療者は、

本人の就労への意欲を向上させるために、患者の不安を適切に捉え、将来の見通しが立てられるような情報提供をしていく必要があると考える。また、ピアサポートとして、社会生活を送る脊髄損傷者から話を聞く機会を設けている施設<sup>16)</sup>もあり、具体的な就労のイメージができるような機会を意図的につくることで、就労意欲の向上に繋がると考える。

脊髄損傷者の受傷後の職場復帰率は、受傷後どの時点で調査するかによって異なるが、リハビリテーション終了時の調査<sup>17)</sup>では10.0%、受傷後5年時<sup>18)</sup>では24.9%であることが報告されている。これは、専門的リハビリテーションが終了して退院することが直接就労と結びつかないことを現している。脊髄損傷の中でも、重度麻痺である頸髄損傷四肢麻痺の場合は、日常生活に多くの介助が必要である上、リハビリテーションの期間が約1年と長期にわたり<sup>19)</sup>、家庭復帰後も自宅でのリハビリテーションに長期間を要する。専門施設でのリハビリテーション中は、同じ目標に向かう仲間や支えとなる医療者の存在が近くにあるため、就労に向けての意欲を維持しやすいが、退院後の生活の中では意欲後退の可能性も考えられる。脊髄損傷は、疾患の特殊性や高い専門性ゆえに急性期、回復期、生活期の切れ目のない連携が重要視されている<sup>20)</sup>。就労というゴール設定がぶれることなく次のステップへと引き継いでいくために、生活期においても切れ目のない円滑な連携体制の確立が必要であると考えられる。

また、脊髄損傷は、障害の特性ゆえに、排泄障害や褥瘡など様々な合併症の管理が必要となる。渡邊と田中<sup>16)</sup>は、復職時に問題になったこととして、排泄管理や疼痛などの健康管理に関することが最も多かったことを報告している。中でも排便管理においては、1回の排泄に長時間を要することも多く、就労の妨げとなることもある。小嶋<sup>21)</sup>は、排泄の失敗が特に強い無力感を与え、恥の感覚を強めることを明らかにしている。本研究の対象者においても、復学時の排便コントロールの困難感が就労への気がかりとなり、就労への踏み出し及び就労の継続における不安要素となっていた。排泄管理に関しては、入院中に管理方法や緊急時の対応など幅広く指導が行われている。しかし、生活習慣や環境の変化による心理的負担が多い中で、コントロールが不良になることも考えられるため、退院後の自己管理能力が非常に重要となってくる。社会生活での困難を見越して、本人が困難な状況に対処する能力を獲得できるような指導が必要であると考えられる。また、障害や合併症に対する職場の理解が得られているかという点に関しても、就労を継続していくためには重要な

ポイントである。就労している状況での受傷であれば、復職への支援として入院期間中から医療者が積極的に介入することができるが、学生時代に受傷した者にとっては、退院後に就労に向かう者も多く、医療者の直接的な介入が難しい。井口ら<sup>20)</sup>が、社会復帰における問題点として、就労支援や生活支援をするコーディネーターの設置についての重要度が高いことを報告しているように、退院後も継続して就労支援や生活支援ができるコーディネーターが設置されることで、就労への踏み出しや就労の継続にも繋がると期待できる。切れ目のない円滑な連携体制の確立においても、重要なことであると考えられる。

## 5. 結論

本研究の結果から、以下のことが明らかとなった。

1. 青年期の脊髄損傷者の就労から現在の安定した生活を獲得するプロセスは、復学の有無に関わらず、【就労に向けての身体的・心理的準備】を整え、様々な不安がある中で【就労への踏み出し】をしていた。現在の安定した生活と就労の両立を維持する努力の上で、【自分なりの充実した生活の確立】をしており、社会の中での自分らしい生き様を見出す【社会における自己の統合】をしていた。また、このプロセスにおいて親、医療者、同じ障害をもつ仲間など【周囲からの就労・社会生活への後押し】が力強い支援となっていた。
2. 青年期の脊髄損傷者は、就労することで新たな自己の役割を認識し、自分なりの生き様を見出していくため、就労することに大きな意義があることが明らかとなった。
3. 青年期の脊髄損傷者にとって、同じ障害をもつ仲間の存在意義は大きく、心理的支えとなっていた。
4. 医療者は、青年期の脊髄損傷者の就労の意義を認識し、将来の見通しが立てられるような情報提供を行い、就労への意欲が向上するような働きかけが必要であることが示された。

## 6. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、対象者が全員就労していること、また、すべて男性である。就労に至っていない者の思いや、様々な経験に対する思いの違いがあると思われる。今後はさらに対象者を増やし、就労の有無、性別などに考慮し、比較検討していく必要がある。また、受傷からの経過が長い場合、当時を回想しての語りによる結果となるため、記憶の不確かさの可能性は否めない。今後は、データ数を増やし探求していくことが課題である。



## 倫理的配慮

本研究は、山陽学園大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号：平26大057）および、対象施設の倫理委員会（承認番号：12）の承認を得て実施した。対象者には、研究の目的と方法について面接時に改めて文書及び口頭で説明し、自由意志での同意や中途での拒否も保証した上で、書面で同意を得た。また、面接内容の録音についても同意を得た。自記での署名が困難な場合は家族の代筆とした。面接はプライバシーを確保した場所で行われ、面接中の体調不良や精神的な負担が予測されるが、体調に応じて面接の中止や、研究協力者である主治医の受診が可能であることを伝えた。収集した情報は、必要内容以外は削除するなど厳重に管理した。なお、本研究における開示すべき利益相反はない。

## 謝 辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました対象者の皆様、研究を進めるにあたりご指導をいただきました皆様に深く感謝申し上げます。なお、本稿は山陽学園大学大学院修士論文を一部加筆・修正したものである。

## 注

†1) 本研究では、「社会生活」を、就労を継続することに限らず、余暇時間も有意義に活用しながら、社会の一員として送る生活と定義している。

## 文 献

- 1) 鐘幹八郎：アイデンティティとライフサイクル論。ナカニシヤ出版、京都、2002。
- 2) 厚生労働省：障害者雇用促進法。 [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou\\_roudou/koyou/shougaisakoyou/03.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/shougaisakoyou/03.html), 1960. (2023.9.2確認)
- 3) 内閣府：令和4年版 障害者白書。 <https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/r04hakusho/zenbun/index-pdf.html>, 2021. (2023.9.2確認)
- 4) 内閣府：第4次障害者基本計画。 <https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kihonkeikaku.html>, 2018. (2023.9.2確認)
- 5) 徳弘昭博：脊髄損傷者の社会復帰（総論1）。住田幹夫、徳弘昭博、真柄彰、古澤一成編著、脊髄損傷者の社会参加マニュアル、第1版、NPO 法人日本せきずい基金、東京、2-16, 2008。
- 6) 池上邦子：青年期の脊髄損傷における自己決定の意義—復学の選択プロセスに焦点を当てて—。日本リハビリテーション看護学会誌, 12(1), 70-80, 2022。
- 7) 益子直紀：小児がん経験者の就職における体験—ライフストーリーの分析から—。日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ, 42, 236-239, 2012。
- 8) 堀田涼子、市村久美子：成人期にある脊髄損傷者の職業人としての自己に対する意味づけ。日本看護研究学会雑誌, 39(4), 43-53, 2016。
- 9) 石田也寸志、林三枝、井上富美子、小澤美和：小児がん経験者の自立・就労に関する横断的実態調査。日本小児血液・がん学会雑誌, 51(5), 482-492, 2014。
- 10) 永井史織、福岡晶子：思春期発症がん患者の社会生活復帰における情報ニーズに関する研究。AYA がんの医療と支援, 2(1), 8-15, 2022。
- 11) 坂本雅代、前田智子：脊髄損傷者の受傷による苦悩から立ち直りに向け意識が変化する要因。看護研究, 35(5), 439-449, 2002。
- 12) 田垣正晋：障害の意味の長期的変化と短期的変化の比較研究—脊髄損傷者のライフストーリーより—。質的心理学研究, 5, 70-98, 2006。
- 13) 落合良行：生涯発達心理学の観点からみた青年期。落合良行、楠見孝編、自己への問い直し、金子書房、東京、1-21, 1995。
- 14) 畑江郁子：小児がん治療を終了した青年の病気体験。小児がん看護, 8, 27-36, 2013。
- 15) 古澤一成：脊髄損傷者の就労。 *Journal of Clinical Rehabilitation*, 29(7), 716-724, 2020。
- 16) 渡邊友恵、田中宏太佳：脊髄損傷者の復職の現状とその支援。日本職業・災害医学会会誌, 67, 467-472, 2019。
- 17) 徳弘昭博：職業復帰と社会的アウトカム。全国脊髄損傷データベース研究会編、脊髄損傷の治療から社会復帰まで—全国脊髄損傷データベースの分析から—、保健文化社、東京、116-129, 2010。
- 18) 内田竜生、住田幹男、富永俊克、徳弘昭博：脊髄損傷患者の復職状況と就労支援。日本職業・災害医学会会誌, 51, 188-196, 2003。
- 19) 伊藤良介：復学。全国脊髄損傷データベース研究会編、脊髄損傷の治療から社会復帰まで—全国脊髄損傷データベー

- スの分析から一, 保健文化社, 東京, 130-138, 2010.
- 20) 井口哲弘, 武居光雄, 田代桂一, 山鹿真紀夫: 脊髄損傷者の治療・リハ・社会復帰における問題点と改善策・現場からの指摘—脊損患者の治療と生活の問題点—. 日本脊髄障害医学会雑誌, 30(1), 26-31, 2017.
- 21) 小嶋由香: 脊髄損傷者の語りと心理臨床的援助—障害受容過程とアイデンティティ発達の視点から—. ナカニシヤ出版, 京都, 2011.

(2023年11月15日受理)

## Efforts Toward Self-Integration in Society Among People with Spinal Cord Injuries (SCI) Sustained During Adolescence: Analysis of the Process of Employment

Kuniko IKEGAMI

(Accepted Nov. 15, 2023)

Key words : adolescence, spinal cord injury, work, social life

### Abstract

The purpose of this study is to clarify the process of getting a stable life from work for adolescents with spinal cord injuries (SCI). A semi-structured interview was conducted with six participants with SCI who were injured while in senior high school or university, and a qualitative inductive descriptive research design was used. As a result of the analysis, the adolescents with SCI had prepared “physical and psychological preparation for work” whether or not they returned to school, and they “took a step towards work” despite a variety of anxieties. They were “establishing their own fulfilling lives” in the efforts to maintain a balance between a stable life gained through work and working life, and finding their own way of life in society. That was exactly “the self-integration in society”. In this process, their parents, medical professionals and peers with the same disability provided powerful support as a “boost to work and social life”. This study showed that medical professionals need to recognize the significance of work for adolescents with SCI, provide information relating to future prospects, and support them to improve their motivation to work.

Correspondence to : Kuniko IKEGAMI

Department of Nursing

Faculty of Nursing

Kawasaki University of Medical Welfare

288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : [kuniko\\_kurose@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:kuniko_kurose@mw.kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.33, No.2, 2024 187–196)